

チャプター6

私は遠く、あなたはもっと近くに

エピソード1～7 日本語訳まとめ

収録エピソード

エピソード1 シスター・シスター

エピソード2 しおれた痕跡

エピソード3 あの世とこの世

エピソード4 ドリーム・オン

エピソード5 荒野の炎

エピソード6 遅れてきた氷鬼

エピソード7 死線から直線へ

EPISODE
1

シスター・シスター



ヴィヴィ

ううっ……。



ヴィヴィ

あと少し……ほんの少しだけ……！



ヴィヴィ

はあ……はあ……。

どさっ——！



ヴィヴィ

はあああ……。



ヴィヴィ

体を動かすのは、容易ではありませんわね。



ヴィヴィ

あのとき……シルヴィアに力を譲り渡したせいなのでしょうか？



ヴィヴィ

体が以前のように動きませんわ。

ギィ——



シオン・ザ・ダークブレッド

ヴィヴィ！



ヴィヴィ

え、ええ？ 次姉様？



シオン・ザ・ダークブレッド

つらいときは、我が来るまで待ってから声をかけろと言っただろう！



シオン・ザ・ダークブレッド

そんなに体調が悪いのに、また一人で何をしようとしていたんだ？



ヴィヴィ

う、ううん……わたくしは……ただ……。



アヤ

放っておきなさい、シオン。



ヴィヴィ

はっ？ 長姉様もいらしていたのですの？



シオン・ザ・ダークブレッド

だが姉さん！ ヴィヴィが一人で無理に歩いて、転んで大怪我でもしたらどうするんだ！



アヤ

シオン！



シオン・ザ・ダークブレッド

う、うう……。



アヤ

こうして何度も動いてこそ、少しずつ慣れていくのよ。



アヤ

ただ横になっているほうが、かえってよくないかもしれないって分からない？



アヤ

イードだって、もう歩き始めたでしょう。



アヤ

イードもヴィヴィも、一人で十分にできることなの。



アヤ

心配しすぎて守ってあげることが、かえって妹たちを弱くしてしまうのよ。



シオン・ザ・ダークブレード

うう……だが……！



アヤ

シオン、あなたが優しいのはよく分かっているわ。



アヤ

でも、どれほど大切な妹たちでも、一人で立とうとするのを妨げてまで世話を焼いてはいけないの。



シオン・ザ・ダークブレード

ううう……。



シオン・ザ・ダークブレード

うわーん！ もう知らん！ 姉さん、まるでクロエみたいなことを言うじゃないか！

タタタッ——！



ヴィヴィ

じ、次姉様！ どこへ行かれるのですの！



アヤ

大丈夫。放っておきなさい。



アヤ

シオンも、私の言ったことを理解してくれるわ。



アヤ

イードが歩き始めてから、あの子なりに感じていることがあるはずだから。



ヴィヴィ

それは……次姉様のせいで、イーダが歩けなかったとおっしゃるのですか？



アヤ

いいえ、そういうわけではないけれど……シオンも、少しは妹たちの世話を焼くのをやめたほうがいいと思って。



アヤ

姉妹同士で助け合うのは当然だけど、シオンは少し度が過ぎるというか。



アヤ

私はもう、シオンにはただ……もっと自分自身のことを大切にしてほしいのよ。



ヴィヴィ

それは確かに……ごもっともですわ。



ヴィヴィ

次姉様には大変お世話になりましたけれど、妹たちの面倒ばかり見ていてほしくはありませんもの。



アヤ

まあ、そうね。たまにはこうして言ってあげるのも、シオンが考えるきっかけになるでしょう。



アヤ

それはそうと、ヴィヴィ。



アヤ

ずいぶん具合が悪そうね。



ヴィヴィ

こ、これはほんの一時の試練にすぎませんわ。



ヴィヴィ

もう少し休めば元通りになるでしょう。最初に目を覚ましたときは、麻痺したようにベッドに横たわることしかできませんでしたし……。



ヴィヴィ

今こうして動き始めているのですから、もっとよくなるということですわ。



アヤ

ふむ……。



アヤ

ヴィヴィ。



アヤ

あなた、ウイに正確には何を頼んだの？



ヴィヴィ

な、何のことでしょう？



アヤ

私に隠そうとしないで。



アヤ

あなたとウイは、昔から親しくしていたでしょう。



アヤ

ウイに何ができるのか、知らないはずがないわ。



アヤ

昔、ウイと私が初めて会ったときは、つまらない願いしか頼まなかったから、その能力が何なのかもよく分からなかったけれど……。



アヤ

今は教団に所属して行動するうちに、ウイの能力がどんなものかは、おおよそ把握しているから。



ヴィヴィ

わ、わたくしは……ただ……。



アヤ

ヴィヴィ。



アヤ

一番上の姉である私にも、打ち明けられないことがあるの？



ヴィヴィ

……………。



ヴィヴィ

シルヴィアを助けるために、私の力を移してほしいって頼んだの。



アヤ

何ですって？



ヴィヴィ

シルヴィアの体が冷たくなっていたの。昔のお姉様や妹たちのように。



ヴィヴィ

私の目の前で、また同じことが起きるのは見たくなかった。



ヴィヴィ

私も半分は正気じゃなかったんだと思う。



ヴィヴィ

それで……私が持っていた、ううん、私が受け継いだお母様の力を、全部シルヴィアに注ぎ込んだの。



アヤ

……………。



アヤ

そうだったのね。



アヤ

ええ、あなたなら、それくらいやってしまうでしょうね。



アヤ

ほら、手を出してごらんさい。



ヴィヴィ

え、えっ？ でも……私に触れたら……！

スツ——



アヤ

大丈夫。心配しないで。



アヤ

あなたの力を他の者へ渡したのなら、水銀の毒はもう残っていないはずよ。



アヤ

そもそも、あの力があつたからこそ可能だったのでしょうか？



アヤ

私たちはまるで、まだ形を整えられていない粘土人形のような存在だった。



アヤ

どんな姿にも変わって、どんな力も扱うことができた。



アヤ

お母様の影響力が弱まるにつれて、少しずつ限界が生まれ始めたとはいえ……。



アヤ

果てしない力は、衰えたとしても、その限界は遥かに高いものなのよ。



アヤ

だからシルヴィアも、再び戻ってこられたのでしょうかね。



ヴィヴィ

うん……そうだと思ってた。



ヴィヴィ

だから私も、もう一度休みながら回復していけば……！



アヤ

あなたの体の中からは……お母様の魔力が一つも感じられないわ、ヴィヴィ。



ヴィヴィ

え……？



アヤ

本当に、きれいさっぱり渡してしまったのね。



アヤ

歩くことさえ、これほどつらそうにしている理由が分かったわ。



アヤ

あなたは完全な白紙の状態になってしまったの。



ヴィヴィ

それはどういう意味なの、お姉様？



アヤ

私たちは生まれたときから、自分たちの力に慣れた状態で生きてきた。



アヤ

小さな身振りや、たった一度手を動かすときでさえ、エルダインの力を無意識に使っていたはずよ。



アヤ

生まれながらに力を持つ者には……普通の状態というものを理解するのは難しいの。



アヤ

夢の中だけで生きていたイードが、現実で動くのに苦労したように……。



アヤ

あなたも、その夢のような力を失って、純粋なあなた自身だけが残ったのよ。



ヴィヴィ

じゃあ……これから、どうなるの？



アヤ

おそらく……動くことくらいなら、訓練して慣れれば大丈夫よ。



アヤ

初めて歩くのと……いいえ、自転車に乗るのに似ていると言うべきかしら？



アヤ

一度乗り方を覚えたあと、長い時間が経って自転車の乗り方を忘れてしまっても……。



アヤ

実際にまた乗ってみれば、すぐに感覚を思い出すようなものよ。



アヤ

でも、あなたが以前から使っていた力は、もう使えないでしょう。



アヤ

日常生活は少しずつ送れるようになるでしょうけれど、あなたが操っていた強大な力は使えない。



ヴィヴィ

イード……イードと、まったく同じになったんだね。



アヤ

少し違うわ。



アヤ

イードは夢の中へ入れば、今でも本来の力を使えるから。



アヤ

けれどヴィヴィ、あなたはそれすら完全に不可能な状態になったの。



ヴィヴィ

……………。



ヴィヴィ

大丈夫。覚悟してやったことだから。



ヴィヴィ

そのくらい……私には何でもないよ。



アヤ

ヴィヴィ、早く回復したいなら、なるべく動き続けなさい。



アヤ

シオンに手伝ってもらうのは構わないけれど……間違っても頼りきりになってはだめよ。分かった？



アヤ

あなた自身の意志のほうが大切よ。一人で立とうとすればするほど、適応も早くなるわ。



ヴィヴィ

う、うん。



ヴィヴィ

でも……あの……。



アヤ

ん？ どうしたの、ヴィヴィ？



ヴィヴィ

ウイは……もしかして見かけなかった、お姉様？



アヤ

ウイを……？



ヴィヴィ

私が目を覚ましてから、一度も会いに来てくれていないの。



ヴィヴィ

少し心配で……もしかしたら、私の顔も見たくなくなったのかな？ 少し無理なお願いをしてしまったから……。



アヤ

ウイはあなたと一番仲がいいから、一度くらいは来ていると思っていたけれど……一度も訪ねてこなかったの？



アヤ

それは少し……変ね？

EPISODE
2

しおれた痕跡



クロエ

ふむ。

ザッ、ザッ――



クロエ

こっちかな？
それとも、あっち……？



クロエ

あ？ ダメだって、セバスチャン！



クロエ

今は忙しいんだから、どこかに行けなんて小言を言わないでよ！



クロエ

あ？ ヴィヴィのお見舞いにでも行こうって？ 何しにそんなことするのさ。



クロエ

もう目を覚まして、シオン姉さんと抱き合いながらわんわん泣いてるに決まってるでしょ！



クロエ

薄情すぎるんじゃないかって？



クロエ

違うってば！ 私はそういう気恥ずかしいことをする趣味がないだけ！ 分かった?!



クロエ

今はあの問題児を心配するより、もっと大事なことがあるんだって。



クロエ

あいつの痕跡が残ってる。



クロエ

あの気味の悪い気配を漂わせてる、幽霊のやつ……。



クロエ

ほんの少しでも現れた場所では、こうやって草や花が枯れてるんだよ。



クロエ

どうして精霊の森の奥に、こんな痕跡があるのかは分からないけど……。



クロエ

精霊の森は、アヤ姉さんやウイが暮らしてる場所のすぐ近くなんだから！



クロエ

絶対に何か企んでるよ。



クロエ

銀石ちゃん……いや、今はシルヴィアだったね。ヴィヴィやシルヴィアを狙ってたことを考えると……。



クロエ

アヤ姉さんやウイに何をするか分からない。私一人でも見つけ出して、懲らしめてやるんだから！



クロエ

あ？ どうやって懲らしめるのかって？



クロエ

まあ～、セバスチャンの拳を頼りにしてるよ。へへっ！



クロエ

……あ？ ああ！ 何をそんなに怖がってるのさ、あ？



クロエ

めめめしないで、あいつが現れたら、その無駄に大きな綿の拳を一発ぶち込めばいいんだよ！



クロエ

あ～、そんなに心配なら、拳の中に石ころでも詰めてあげようか？ ふふっ、あとでちょっと改造してあげるよ。

ゴンッ！



クロエ

うわあっ！ な、何?!



シルヴィア

な、何をしている者でございますか?!



クロエ

あ？ 君……誰？



シルヴィア

え、えっ？ クロエ叔母様？



クロエ

あ……ああ？ 叔母……様？ あ？



クロエ

君……君がシルヴィアなの？ 銀石ちゃんが？ 君なの?!



シルヴィア

さようございます。



シルヴィア

こうして直接お会いするのは、今回が初めてでございます。



シルヴィア

その独特な「あ？」という話し方、はっきりと覚えておりますが……。



クロエ

ああ……君がシルヴィアなんだね。そっか、君がシルヴィアなんだ。



クロエ

シルヴィアって、こんなにかわいい子だったんだ……！ すごくかわいい！ へへっ！



シルヴィア

過分なお言葉でございます、叔母様。



シルヴィア

わたくしの容姿など、叔母様の整然として気高い齒並びとは比べものになりません。



クロエ

あ～、へへっ。褒めてくれてありがと～。それ、褒めてるんだよね？



クロエ

それにしても、私……本当に叔母さんになっちゃったんだね～？ あは……あははっ！



シルヴィア

わたくしが殻の中にいた頃、叔母様がしてくださったことは、すべて覚えております。



シルヴィア

叔母様がこっそり用意してくださった品々から、お母様を助けてくださったことまで……！



クロエ

あ〜、へへっ！ まあ、大したことじゃないよ。



シルヴィア

ところで……叔母様は精霊の森の真ん中で、何をなさっているのですか……？



クロエ

あ！ ああ、そうだった！ それは私のセリフだって。



クロエ

君はヴィヴィ姉さんのそばにいて、看病とかしてなくていいの？



クロエ

子供のくせに、もう家を飛び出して姉さんに心配かけちゃダメでしょ！



シルヴィア

そ、それはお互い様ではございませんか？ クロエ叔母様こそ、お母様のお見舞いに一度もいらしていないではありませんか……！



クロエ

あ、うん、あ……。
……………。



クロエ

じゃあ、おあいこってことで。



シルヴィア

おあいこ……。はい、おあいこでございます。



クロエ

とにかく……。私はあの幽霊を捜してたんだよ。



クロエ

君とヴィヴィを気味悪く追い回してた、あいつのこと。



シルヴィア

な、なんと？ わたくしも同じでございます！ 調査していたところ、この精霊の森には特に、あの者の痕跡が多く残されておりましたので……！



クロエ

あ！ やっぱり！ そうだね？ 君が見てもそう思うよね？ 絶対におかしいよね?!



シルヴィア

おあいこでございます！



クロエ

うふふっ、姪っ子ちゃんったら、この叔母さんとすっごく気が合うね？



クロエ

あの「頑固でわがままで、少しは常識を買ってきてほしい姉さん」とは大違い！ へへっ！



シルヴィア

わ、わたくしはお母様をそのようには思っておりませんが……叔母様と気が合うという点については、間違いないようでございます。



クロエ

それじゃ、私たちは同じやつを追ってたんだし、力を合わせようよ！



クロエ

足跡の形に草が枯れてるところを見ると……あいつ、この辺りを行ったり来たりしながら道に迷ってたみたい。



クロエ

まだ近くにいるかもしれないから、気をつけないと！



クロエ

この叔母さんが先頭を歩くから、ちゃんと後ろについてきて。いいね？



シルヴィア

お、お気遣いはありがたいのですが……わたくしは、そのようには考えておりません。



クロエ

ん？ どういうこと？



シルヴィア

足跡の流れを見ますに……一度こちらの方向へまっすぐ歩いてきたあと……反対方向へ向かって、再びまっすぐ歩いていった様子。



シルヴィア

これは、自分がすべき何かを終えたのち、引き返したということではございませんか？



シルヴィア

ゆえに、あの幽霊は現在、この付近にはいないというのが、わたくしの考えでございます。



クロエ

そ、そうなの？



クロエ

じゃあ、どこに行ったのさ？



シルヴィア

それはわたくしも調査中でございますが、一つ確かなことは……。



シルヴィア

現在、ウイ叔母様の居場所が分からなくなっているということでございます。



クロエ

あ……？ ウ、ウイが？ それ、どういうこと？ 君がどうして知ってるの?!



シルヴィア

わたくしは、ウイ叔母様がお住まいになっている池のほとりへ、すでに足を運んでまいりました。



クロエ

なに……?!



シルヴィア

最後にウイ叔母様をお見かけしたとき……感情が非常に不安定になっているように見えました。



シルヴィア

そのため、どこかへ身を隠された可能性もございますが……。



シルヴィア

お母様に会いにいらしていないというのは、あまりにも不自然でございます。



シルヴィア

ウイ叔母様ならば……どれほど迷っていたとしても、お顔を見るためだけにでも、必ずいらしたはずでございます！



クロエ

うっ……。



クロエ

そ、そんなはずない！ ダメだ！ そんなこと、あっていいわけない！



クロエ

まさかあいつが……ウイに何かしたっていうの?!



シルヴィア

詳しいことは、わたくしにもまだ分かりませんが……何らかの関係があるように思われます。



シルヴィア

そうでなければ、ウイ叔母様のお住まいの近くに、あの幽霊の痕跡が残っている理由がございません。



クロエ

うっ……うううっ！



クロエ

ウイが暮らしてる場所は、どっち？



シルヴィア

あちら……あちらの方向でございます。



クロエ

ふむ。



シルヴィア

えっ？ なぜ反対の方向へ……！



クロエ

そこはもう君が調べたんでしょ！ ウイへの用事を済ませたあと、あいつが向かった方向を追わなきゃダメじゃない！



クロエ

早くついてきて、シルヴィア！ ウイが危ないかもしれないんだから！



シルヴィア

は、はい！ 承知いたしました！ すぐに参ります！

EPISODE
3

あの世とこの世

教主

ニフェル……ニフェルか……。

教主

死の幽霊……。

教主

エーリアスにおける死……週末農場？

教主

以前、リニューもそんなことを言っていたな。

教主

週末農場とは、死を遠回しに表現した言葉。

教主

死という概念を知らないエーリアスの住民たちが作り出した、純朴で幼稚な言い回しだと。

教主

だとすれば、ニフェルの言う「死」というものは……。

教主

私が生きてきた世界における死の概念と、まったく同じものなのだろうか？

教主

いずれにせよ、誤って生み出された概念なのだとしても……。

教主

世界樹もその概念を人づてに聞いただけで、本当の死が何なのかを知るはずがないんじゃないか？

教主

私がいた世界でも……死を正しく理解することなんて不可能じゃないか？

教主

死ぬということは結局……実際に経験することはできないのだから。

教主

世界樹が人間の知識を聞いたのなら、実際の死について学んだのではなく、死に対する解釈や幻想を取り入れた可能性のほうが高そうだ。

教主

だとしたら……そう考えてみると……。



ヴィヴィ

教主様!!!!



ヴィヴィ

お助けくださいませ！ ウイがいなくなっちゃいましたわ！

教主

な、何だって？ いきなりどういうことだ?!



アヤ

あ、教主、ごめんなさい。



アヤ

ヴィヴィが少し、ひどく取り乱していて……。



アヤ

わ、私が説明するわ！ ヴィヴィは少し落ち着いていて。いいわね？



ヴィヴィ

間違いなく、あの者の仕業ですわ！



ヴィヴィ

あのニフェルという幽霊に、何かされたに決まっていますわ！

教主

ヴィヴィ、どうしてそこまで確信しているんだ？
ウイが本当にニフェルに何かされたという証拠は、何もないだろう。



ヴィヴィ

それは……その……！



ヴィヴィ

わたくしのせいですわ！



ヴィヴィ

ううっ……私のせいだ。また……！ 私のせいで……！

教主

落ち着いて話してみて。全部聞くから。



ヴィヴィ

つまり……わたくしがシルヴィアを生き返らせたことで……。



ヴィヴィ

その過程でウイの力を借りたのですが……
きっと、それが気に入らなかったのですわ。



ヴィヴィ

あの幽霊は、シルヴィアを連れていこうとしていましたから……。



ヴィヴィ

わたくしが……いいえ、ウイがあんな力を使ったことで、怒っているのではないかと……！

教主

そう考えることもできるな。

教主

幽霊にとっては、自分の観念を無視する行いをされたということか？



アヤ

そうよ、教主。幽霊たちは普通、自分の観念については我が強くて、いつも防衛的な態度を取るから……。

教主

そうだな。以前もシェイディとリムは、いつもそれが原因で喧嘩していた。

教主

ニフェルにとって、死とは当然のことなのだろうし……。



アヤ

ええ。



ヴィヴィ

教主様！ これから、どうすればよいのでしょうか？
ウイを捜すには、どこへ行けばよろしいのですか？

教主

まずは……。



ヴィヴィ

荒野へ行くべきでしょうか？ 荒野のどこへ行けば？
ウイをどこへ連れていったのでしょうか？



ヴィヴィ

ううっ……はい？ は、はい……。

教主

私が何とかしてみるから、君は少し休んでいて。



ヴィヴィ

ですが、教主様……！

教主

まだそんなふう動いていい時期じゃない。今の君は、一人ではまともに動くこともできないだろう。

教主

少なくとも体調がもっとよくなるまでは、ほかの者の心配はやめて、おとなしく休んでいて。



ヴィヴィ

ですが……わたくしは……それでは……！



アヤ

ヴィヴィ、教主がこれまで教団でどんなことをしてきたか、よく知っているでしょう。



アヤ

教主なら、信じて任せてもいいんじゃない？



アヤ

教主の言っていることも間違っていないから、もう少し落ち着いて待ってみましょう。



ヴィヴィ

うっ……うん、お姉様。

教主

ひとまず、ヴィヴィは部屋へ戻って休んでいて。

教主

どうしても助けが必要になったら、こちらから君を訪ねるから。いいね？

教主

今のヴィヴィは、体も心も状態がよくないように見える。こんな状態で、この件に関わらせてはいけない。

教主

一人でじっとしてられないからって、ふらっと飛び出したりしちゃ駄目だよ？



ヴィヴィ

ううっ……はい……。



アヤ

行きましょう、ヴィヴィ。私が支えてあげるわ。

教主

あ、待って、アヤは少しだけ……少し私と話をしよう。



アヤ

私と？ ええ……分かったわ。



アヤ

ヴィヴィ、一人で部屋まで行ける？



ヴィヴィ

……行けるよ。



アヤ

それで教主、どうしたの？

教主

扉を閉めてくれる、アヤ？



アヤ

と、扉？ 閉めてほしいの？
ふ、二人だけの秘密のお話をするつもりなの？

教主

そ、そうだ。秘密の話ではあるけど……。

教主

……変な話じゃないから!!



アヤ

え、えっ？ 変な話？
どうして急にそんなに興奮しているの、教主？

教主

あ、アヤにはこれまで散々な目に遭わされてきたから、つい過剰反応してしまった。

教主

とにかく！ 私が話したいことというのはだな。

教主

アヤは雪を操る力……つまり、冬の力を扱っているんだよな？



アヤ

うーん……まあ、そう言うこともできると思うわ。



アヤ

私の能力が正確には何に由来しているのか、分からないけれど……。



アヤ

雪や寒さは普通、冬と深い関わりがあるから、そう表現することもできるでしょうね。

教主

そうだ。かなり異質な力だよな？



アヤ

えっ？ 異質な力？

教主

エーリアスにとって、という意味だ。

教主

魔女たちは、冬を死と同一視しているんだろう？

教主

だが、エーリアスは死にまつわるものを、ひた隠しにしていた世界だったから……。



アヤ

ああ……そうね。そのとおりよ。



アヤ

冬や雪は、もともと存在しなかった概念なの。



アヤ

それらが初めて生まれてからは……。



アヤ

私のお母様は、そういうものが世界にはびこることを好まなかったから。

教主

それならアヤ、君は……最初から冬の力を扱えたのか？

教主

昔、君たち永遠に生きる者が、みんなで一緒に暮らしていた頃のことだ。

教主

その頃にも、雪を降らせたりできたのか？



アヤ

いいえ、そうではなかったわ。



アヤ

あの頃は、雪が何なのかさえ知らなかった。



アヤ

姉妹たちと一緒に暮らしていた頃から、初めて目を閉じたあの瞬間までね。





アヤ

お母様からもらった薬を飲んで、眠りに落ちる頃に……空から降る雪を初めて見たの。

教主

永遠を生きる者たちが死を経験したとき……そのとき、この世界に初めて雪が降ったのか。

教主

あのとき雪を降らせたのは、おそらく世界樹自身だったのだろう。

教主

週末農場という死後の世界とは、また少し印象が違うけれど……。

教主

私たちの世界で、冬を死の季節と呼ぶ……そんな感覚と、ある程度通じるものがあるな。



アヤ

教主、何か思いついたことでもあるの？



アヤ

ウイを捜す、いい方法でも思いついた？

教主

さて。ウイが本当に消えたのかどうか、まず確認する必要があるけれど……。

教主

何か試してみることはできそうだ。



アヤ

試してみる？ 何をするの？

教主

私も確実な方法を知っているわけではないから、少しだけ待っていて。

教主

説明するのが少し難しいんだ。



アヤ

うーん、分かったわ、教主。



アヤ

教主がそう言うのなら……私もひとまず我慢して待っているわ。



アヤ

まだ、はっきりとは話せない段階なのでしょう？
そのくらいは私にも分かるわ。

教主

うん。君やヴィヴィをひどく落胆させないように、確認してから話したい。



アヤ

それに……。



アヤ

ウイのことも心配だけれど、今はヴィヴィのことも心配だから、そばにいてあげたいの。

教主

そうだな。ヴィヴィの看病もして、あまり取り乱さないように、そばでよく見ていてあげて。

教主

アヤの言うことなら、よく聞いてくれそうだから。



アヤ

ええ、分かったわ。



アヤ

あまり一人で背負い込まないで。無理そうと思ったら、必ずすぐに言ってね？

教主

ウイが本当にニフェルに何かされたのか、単に留守にしているだけなのかは分からないが……。

教主

闇雲にウイを捜しに出るよりは……もう少し見込みのある方法を試してみるのも悪くないだろう。

教主

ニフェル。

教主

ニフェルさえ見つけることができれば、今の状況は大きく進展するはずだ。

教主

本当にあいつがウイを連れ去ったのか。なぜ教団の近くまで来て、ヴィヴィやほかの使徒たちを襲ったのか……。

教主

そして……世界樹が考えていた「死」とは、何だったのか。

教主

今起きているすべての出来事が、ニフェルと絡み合っている。

教主

いずれにせよ、私がニフェルを見つけ出すこと。それが始まりなんだ。

EPISODE
4

ドリーム・オン

教主

準備はいい？



スキア

こくこく——

教主

それじゃあ……心の中の飛び石へ入ろう、スキア。



スキア

額を重ね、温かく柔らかかに揺らめく、彼方の領域へ。



スキア

互いの意識に、それぞれの根を下ろして……静かに、穏やかに。



スキア

互いが互いのために、



スキア

永遠に、いつまでも。

教主

おお、いいね！ きれいに入れた。

教主

もう心の中の空間へ入る手順には、すっかり慣れたみたいだ。



スキア

共鳴の儀式へ入る速度も上がっています。



スキア

これまで、教主様一人で練習でもなさっていたのでしょうか？

教主

ああ……いや、別に練習したことはないよ。



スキア

天賦の才でしょうか？ それとも、選ばれた人間だから？



スキア

いずれにせよ、大変よい兆候だと思います。



スキア

教主様がこの儀式に慣れるほど、ほかの司祭たちを目覚めさせられる可能性も高まりますから。

教主

うん、そうだね。いろいろ試しながら、もっと慣れていかないと。



スキア

今日は何か変わったことを試してみたいと、おっしゃっていましたね、教主様？

教主

その前に少し……了承を得ておく必要があると思って。



スキア

はい？

教主

少し危険なことかもしれないから……。

教主

私が頼んだからって、無理にやる必要はないんだけど……ええと、つまり……。



スキア

教主様、そこまでためらわなくても大丈夫です。



スキア

本当に危険だと思えば、私がお止めすればよいだけです。まずは気兼ねなくお話しください。

教主

……分かった。

教主

私を荒野へ連れて行ってほしい。



スキア

え、えっ……えええっ?!



スキア

そ、そんな！ 荒野へですか？ 突然どうして……！

教主

以前、私と初めて会ったとき、教団の過去について話してくれたことがあったよね？



スキア

ああ……はい、確かにお話ししましたが。

教主

夢を通じて荒野へ行き、世界樹の怒りを買ったことがあると言っていた。そうだよ？



スキア

はい。正確に覚えていらっしゃいますね。

教主

それから……最近、また一つ分かったことがあるんだ。



スキア

何が分かったのですか？

教主

長く夢を見続けるほど、週末農場へ近づくということ。



スキア

そ、そうなのですか？ 誰がそのようなことを？

教主

うーん、ニフェルがそう言っていたと聞いたんだけど……。

教主

正確には、シルヴィアが何かを隠しているように見えたから、考えを読んで偶然知ったんだけど……。

教主

その……匿名の情報提供だよ！ 恥ずかしがり屋の誰かが打ち明けてくれたんだ。



スキア

そうなのですか？



スキア

うーん……長く夢を見続けると、週末農場へ近づく？



スキア

夢の中の世界が長く続けば続くほど……どこか違和感だけが残る空間へ変わっていましたが……。



スキア

それは、週末農場へ近づいていたからなのでしょうか？



スキア

分かりませんね。



スキア

ん？ いえ、それなら……教主様は、なぜ荒野へ行こうとなさっているのですか？

教主

そこに、ニフェルという幽霊がいるのか確かめたい。

教主

本当にそこに週末農場という領域があるのかも気になるし……それから……。



スキア

うーん……その幽霊とお話を？ いったい、どのようなお話をなさるおつもりですか？

教主

うーん。

教主

まあ……いろいろと。あいつが関わっている出来事が多くて、少し複雑なんだ。



スキア

危険です。本当に危険な行為です。



スキア

何も知らずに、ほかの司祭の夢へ入ることよりも危険かもしれません……。



スキア

ネル司祭長やシスター・ジョアンには、ご相談なされたのですか？

教主

あ……いや、してないけど。ははっ。



スキア

教主様！ これでは、また私が教主様を危険な目に遭わせたように見えるではありませんか?!



スキア

ただでさえ前回の事件以来、あのお二人は私に山ほど書類を押しつけてくるのですよ！



教主

しょ、書類？ 教団の仕事の書類？



スキア

そうです！ きっと私が教主様にしたことを根に持って……！

教主

違うよ。それが普段どおりの仕事なんだ。



スキア

え、ええ？

教主

むしろスキアは、少ないほうだよ。



スキア

ええええっ?!

教主

スキア。ネルやジョアンが、仕事を個人的な腹いせに利用することはないよ。

教主

二人とも、教団の仕事には本気だから。



スキア

うーん……。



スキア

と、とにかく、そうおっしゃられても……!



スキア

いくら夢の中とはいえ、教主様を荒野へお連れすることはできません。



スキア

夢の中の世界が、すでに週末農場へ近い場所だというのなら、なおさらです!



スキア

せめて教主様が、この夢の中から脱出する方法でも身につけているのなら、話は別ですが……。

教主

それなら……連れていってくれるの？



スキア

まあ……すぐに抜け出せるのなら……大丈夫なのではないでしょうか？



スキア

適切な時に夢から目覚められない状況が、最も危険でしたから……。

教主

うーん。それについても、少し考えてみたんだ。



スキア

ん？ 何か分かったことがあるのですか？

教主

ぎゅむっ——



スキア

きゃあああっ!!



スキア

ひゃあっ?!



スキア

あいたたたっ——！



スキア

な、何が……？ うう……頭が痛い……。

教主

あのとき、ヴィオラという司祭の夢から出た時のことを思い返してみただけど、やっぱりこれで合っているみたいだ。

教主

夢を見ている本人に強い衝撃を与えると、夢が乱れるらしい。

教主

高い場所から落ちたり、頬をつねったり、拳骨を食らわせたり。



スキア

はあ？



スキア

本当に、そんなことで目覚められるのですか？

教主

ただし……本気でやらないと駄目なんだ。

教主

夢が壊れるほどの強い衝撃を与える必要があるみたいで。

教主

最近よく明晰夢を見るから、いろいろ試しているうちに分かったんだ。

教主

さっきも、夢の中ですごく痛かったでしょう？



スキア

う、うーん……。



スキア

夢の中で受けた痛みがどれほどだったのか、よく思い出せませんが……。

教主

うーん。何度も殴られていれば、そのうち覚えるよ。



スキア

……………は？



スキア

夢の中で、いったいどれほどご自分を殴り続けたのですか、教主様？

教主

どうせ損はしないでしょう。夢でしかないんだから。



スキア

……………。



スキア

教主様のご様子が、少し心配になってきました。無理をしすぎているのでは……。

教主

とにかく、今度は私の夢の中へ入ろう。

教主

脱出方法を身につけたら、連れていってくれると言ったよね？



スキア

はあ……。



スキア

はあ？ はああああ？



スキア

ええ？ いえ、それはあまりにも強引ではありませんか？ 脱出方法と危険性は別の問題です！

教主

スキア、これは大切なことなんだ。

教主

様子がおかしいと思ったら、すぐに脱出する。だから一度だけ、私を荒野へ連れて行ってほしい。



スキア

うっ……。

教主

スキア。教主がここまで頼んでいるのに、約束を破るつもり？



スキア

ううっ……。



スキア

はあああ〜……。



スキア

こくこく——

教主

よし。それじゃあ、案内をお願いするよ。

EPISODE
5

荒野の炎



スキア

それでは、ご準備はよろしいですか、教主様。

教主

うん、準備はできた。正直、何を準備すればいいのかもよく分からないけど……。



スキア

心の準備でしょう。どのような事態が起きても慌てず、私のそばから決して離れないでください。



スキア

私とて、夢の中の世界について、すべてを知っているわけではありませんが……。



スキア

かなり長い間、この世界に閉じ込められていた経験はあります。何とかお力になってみせましょう。



スキア

万が一、教主様の身に何かあれば、ジョアンやネル司祭長に合わせる顔がありませんから。



スキア

ただでさえ、夢を研究するために定期的に教主様とお会いするたび、あのお二人から怪しげな目で見られるのが負担になっていたところですし……。

教主

そ、それじゃあ、ひとまず霧の森の方角へ向かえばいいのかな？



スキア

はい、そうなのですが……。

教主

それじゃあ、早く行こう！



スキア

お、お待ちください。



スキア

ここは夢の中の世界。



スキア

ご自身の足で、そこまで歩いていく必要はありません。



スキア

教主様は、すでに霧の森へ行ったことがあるとおっしゃっていましたね？

教主

ん？ ああ……昔、マカシャを捜しに行ったときに行ったことがあるよ。



スキア

でしたら、目を閉じて、そこまでの道筋を思い浮かべてみてください。



スキア

そして、教主様がお望みの速さを思い浮かべながら、ゆっくりと進んでみていただけますか？

教主

そうすれば……すぐにそこまで行けるの？ 夢の中で使える移動方法みたいなもの？



スキア

そのとおりです。



スキア

教主様の頭の中のイメージが強固で明確であるほど、夢の中で利用できるものも増えるのです。



スキア

時には、かえって曖昧な想像力が役に立つ場合もありますが……今はひとまず、私の申したとおりにしてみてください。

教主

うーん……分かった。思い出してみるよ。

教主

マカシャを……捜しに行ったとき……始まりは精霊山からだったよね？

教主

それから山を下って……。

教主

獣人の森を通り過ぎて……。

教主

幽霊沼へ……？

教主

おおっ?! おお! 幽霊沼だ! 目を閉じるまでは森の中だったのに!



スキア

いかがですか? 面白いでしょう?



スキア

まあ、このようなものも、結局は一時の楽しみにすぎませんが……。

教主

一時だけ? これなら毎日でも楽しめそうだけど?



スキア

「明確なイメージが必要」という条件には、限界がありますから。



スキア

教主様にとって未知の領域である、ここから先では、この方法は役に立たないでしょう。

教主

じゃあ、どうなるの? 何もない空間みたいなものが現れる?



スキア

いいえ、そうではありません。



スキア

結局のところ、この夢を構築したのも世界樹。



スキア

世界の物理法則だけでなく、心象の基盤もまた、世界樹から生まれたものですから……。



スキア

基本的な地理は、世界樹が自ら作り上げたエアリアスと、ほとんど同じなのです。



スキア

大昔、司祭たちとともに夢の中の荒野を探索した経験を思い出しながら、ご案内いたしましょう。



スキア

少々記憶が曖昧ではありますが……それでも、荒野を歩くことに支障はないはずです。



スキア

さあ、私の手をお取りください。霧の森は道に迷いやすい場所ですから。

選択肢：うん、分かった。

スキアの手を取り、前へ進む。

ザッ、ザッ――

教主

夢の中でも、霧の森は霧だらけなんだね。

教主

ほとんど前が見えない。スキアがいなかったら、ずいぶん迷っていたらうな。

ひひっ……。

教主

ん、ん？ 何だ、このぞっとする声は?!



スキア

何の声でしょうか？

教主

この声、聞こえない？

ひ……ひひっ——

教主

この声は……これは……?!

いっひひ!!

教主

マカシャの笑い声じゃないか?! 何で？ どうしてマカシャがここにいるんだ？



スキア

ああ……それはおそらく、曖昧なイメージの隙間に入り込んだ、教主様の想像力でしょう。



スキア

教主様は、この場所であの魔女と出会ったのですかね……？



スキア

声が脳裏に焼きつくほど、存在感が強かったようですね。

いっひひひひ！ ひひっ！

教主

ああ……確かに存在感は強かったな。うーん……。

しばらくして。



スキア

もうすぐ霧の森も終わりです。



スキア

ここを越えれば……荒野が広がっています。



スキア

さあ、いかがですか、教主様？ 悪名高き荒野を、実際にご覧になったご感想は。

教主

え……？

教主

ここが……荒野なの？

教主

でも……まったく荒野には見えないけど？



スキア

実に皮肉なものです。



スキア

先ほど申し上げたでしょう。夢の中の世界は、世界樹の心象から生まれたものだ。



スキア

夢の中の荒野は、現実の荒野とは異なり、緑が生い茂る場所なのです。



スキア

おそらく……世界樹は、このような光景を夢見ていたのではないのでしょうか？



スキア

世界のすべてが、このような青々とした野原の広がる美しい場所になればよいと……活気に満ちた、明るい世界になればよいと。



スキア

その思いが作り出した、巨大な矛盾なのではないかと思います。

教主

これが、世界樹の望んでいた世界の姿……？



スキア

……………。



スキア

昔、司祭の中には、世界樹を恐れたり疑ったりして、信仰を捨てる者もいましたが……。



スキア

この光景を眺めていると、再び世界樹を信じる気持ちが湧いてくるのです。



スキア

このような夢を抱いている神であれば、なぜか信じてもよいような……そのように思えてくるのです。



スキア

だからでしょうか。司祭としての日々がどれほど厳しく苦しいものであっても……私は簡単には信仰を捨てられませんでした。

教主

うーん。



スキア

まあ、古びた司祭の戯言にすぎません。どうかお気になさらないくださいませ。

教主

よし。それじゃあ……例の声が聞こえたという場所へ行ってみよう、スキア。

教主

今はもう、私たちが叱りつける世界樹もないんだから。



スキア

……………。



スキア

はい、承知いたしました。

ぐすっ、ぐすっ――

教主

ん？ 何だ？ 今度は誰かの泣き声が聞こえる。これも私の想像の一つなのかな？ でも私は、ここに来たこともないのに……。



スキア

今度は、どのような声が聞こえるのですか？

教主

ああ……ほんのかすかに……。

ぐすっ、ぐすっ！

教主

泣き声のようなものが……。



スキア

泣き声ですか？ ん？

ふえええ〜ん、ぐすっ、ぐすっ！

教主

えっ？

教主

あれはベラじゃないか！ どうしてベラがここに？ 今朝早くからネットカフェへ行って飛び出して……あっ。私の想像か？ 私、意外とベラのことを心配していたんだな。まったく、私もお人好しなんだから。



スキア

あ、あの幽霊が、まさか教主様のおっしゃっていた例の幽霊なのですか?!

教主

え？ 何だって？ スキアにもベラが見えているの？

教主

どういふことだ？ いったい何が……。



ベラ

教主ううう!!! ふえええん!!

教主

ええっ? な、何だお前! 誰だ! ベラじゃないな、この夢の怪物め!!

むぎゅっ!



ベラ

ぐえっ!

教主

おお、何だ? 私の財布からお金を抜いたのがバレるたび、こうやって締め上げていた感触そのものじゃないか?

教主

さすが夢というべきか。再現度が高いな。

EPISODE
6

遅れてきた氷鬼



ベラ

あー、もう！ ちょっと！ なんで殴るのさ！



ベラ

教主なら何してもいいわけ？ あ？ 今回はお小遣いだって盗ってないじゃん！

教主

な、何だって？ いくら夢の中とはいえ、そんな生意気な態度を取るなら――



スキア

教主様。この幽霊は、教主様の想像ではないようですが。

教主

え？ このベラが……本物のベラだって？



ベラ

はあ？ 本物だの偽物だのって話は、とっくの昔に終わったでしょ！ まだそんなこと言ってんの?!

教主

本当にベラなの？ どういうことだ？ どうして君がここにいるの？

教主

今朝、モナティウムへ遊びに行ったはずだろう！

教主

それに、どうやって私の夢へ入ってきたの?!



ベラ

何言ってるのさ！ ここが君の夢だって？ ずいぶん都合のいい夢だね。

教主

いったい、どうなってるんだ？



スキア

うーん……。



スキア

荒野は、無数の声が漂っていた空間……。



スキア

あらゆる夢が混ざり合う空間……。



スキア

エーリアスの外にある荒野に、共鳴地帯のようなものが形成されたのかもしれない。



ベラ

もう～、ぶつぶつうるさいな。退屈な話はやめてよ！ 私は君じゃなくて、教主と話してるんだけど？



ベラ

それより、教主はどうやってここまで来たの？ 霧の森はどうやって越えたわけ？



ベラ

あのトラとヘビと、脚の生えた家に乗って一緒に来たの？

教主

い、いや。私とスキアの二人だけで来たけど……。

教主

それなら、君はどうやってここへ来たの？ ネットカフェで居眠りでもしてるの？



ベラ

ネットカフェになんて行ってないってば！



ベラ

ただちょっと……一人の時間を過ごしたくて、たまに来る場所なの。

教主

一人の時間……？ ベラ、君……。

教主

(何だ？ こいつ……普段しないようなことをしてるな)



ベラ

わ、私だって悩みくらいあるんだから！



ベラ

たまに頭を整理するために、草を眺めながらぼーっとしに来る場所なの！

教主

く、草を眺めながら？



ベラ

草を見ながら、ぼーとするの！



ベラ

見てよ！ ここ、静かできれいでしょ。



ベラ

ふふん、そんなに意外？ 私にだってクラシックな品格くらいあるんだよ？



ベラ

この天才様には、「意外な一面」ってものもあるのさ。



ベラ

毎日のようにネットカフェへ入り浸って、ラーメンばかり食べている姿なんて、ほんのたまにしか――

教主

でも、一昨日もネットカフェへ行ってたよね。



ベラ

そ、それは一昨日の話でしょ！



教主

その前の日には、教団の献金箱からお金を抜いて、ネルに髪をつかまれて引きずられてきたよね。



ベラ

そ、そんなの全部、一時のことだって！ もうやめて！ 私の黒歴史を一つずつ掘り返すのはマナー違反だよ！

教主

はあ〜、分かったよ。



ベラ

ふう、そうそう。その姿だけ覚えておいてよ。

教主

お、おう……。

教主

(そういえば……さっき、こいつ泣いてなかったか?)

教主

(ただ草を見てぼーとしていただけには見えなかったけど?)

教主

ベラ。さっきは、どうして泣いていたの?



ベラ

え、ええ? あ? だ、誰が泣いてたって?

教主

(泣いていたんじゃないのか? 聞き間違いだったかな)

教主

(何が何だか分からないけど……今はほかに急ぐことがあるし、また今度……)

教主

うん。とにかく……ここでぼーとするのもほどほどにして、早く目を覚ますんだよ。分かった?

教主

ネットカフェのパソコンの前で眠ったままだったら、料金が無駄になるだけだろう。



ベラ

ネットカフェには行ってないって言うてるでしょ?!

教主

はいはい、分かった、分かった。

教主

あとで夕食には戻ってくるよね? 今夜のおかずは幽霊プリンだから、時間どおりに来るんだよ?



ベラ

えっ？ ほ、本当？ あはは！ 今日は面白いおかずだ！ へへっ！



スキア

……………ずいぶんお優しいんですね、教主様。

教主

(ん？ いや、まあ……ベラはよく問題を起こすけど……どこか憎めないというか)

教主

(まあ～、そういうことだよ～)

ザッ、ザッ——



ベラ

(……………)

それから、またしばらくして。

教主

草原はきれいだけど、本当に広いな。

教主

夢だから疲れなと思っていただけ……意外と疲れてきた気がする。



スキア

普段歩いているときの感覚を、教主様の夢が再現しているのでしょう。



スキア

もう少しだけ頑張ってください。まもなく到着します。

教主

ん？

教主

あそこに……何か丘のようなものがあるね。



スキア

よくお気づきになりました、教主様。



スキア

あの場所です。荒野を漂う声が集まる地点なのです。



スキア

以前、初めて発見したときは、近づくほど声ははっきりと聞こえてきたのですが……。



スキア

今はただ、静まり返っているだけです。

教主

(うーん……)

教主

(以前の事件でアイシアを問い詰めたときに得た情報と、似ている気がする)

教主

(荒野の真ん中に、巨大な丘のようなものがあったと言っていたよね?)

教主

(スキアが言う、声が集まる場所と一致しているのか?)

教主

(まるで……道に迷った魂たちがたどり着く、終着点のような……)

教主

(神話や童話に出てくる描写と似ている)

教主

(やはりエーリアスにおける死とは……作り上げられた幻想のようなものなのか?)

教主

(アイシアは、あそこへ入ったときにニフェルと会ったと言っていたから……)

教主

うん……よし。

教主

もう大丈夫だ。



スキア

はい?

教主

スキア。君は夢から目を覚まして。



スキア

えええ？ 突然、何をおっしゃるのですか……？!

教主

そんなに慌てないで。いわば安全装置のようなものだよ。

教主

さっき、夢の中で君を目覚めさせたときに使った方法を覚えているよね？



スキア

拳骨……のことでしょうか？ 高いところから落ちるなど、そのような方法をおっしゃっているのですか？

教主

今からだいたい三十分後くらいかな？ それくらいあれば十分だと思う。

教主

君が目覚ましてから三十分ほどたったら……眠っている私に、思いきり拳骨を浴びせて。



スキア

そ、そんな、私にそのようなことができるはずが……！

教主

いや、やるんだ！ 万が一、何か問題が起きたら……何をしてでも私を起こしてほしい。

教主

そのために、君と一緒にここまで来たんだ。



スキア

教主様……！



スキア

夢の中で受けた拳骨と、外の世界で受ける拳骨が同じものかどうか分からないではありませんか？



スキア

地下の司祭たちは、何をしても目を覚まさないというのに……。

教主

いや、十分似ているということは分かっている。

教主

私みたいな夢の初心者……のような者なら、それだけでも十分だと判断しているんだ。



スキア

はい？ それをどうしてご存じなのですか……？

教主

この前、夢の中を歩き回っていて寝坊してしまって、ネルに棒で叩かれたことがあるんだ。



スキア

……………。



スキア

……はい？

教主

ああ、はは！ ネルも最初からそんなことをしたわけじゃないよ……私の体を揺すっても反応がなくて、怖くなったみたいで。

教主

いろいろ試した末に、イードから教わった心肺蘇生術を妙な形で覚え違えていたみたいなんだ。



教主

クレープが使っていたモップを奪ってきて、私が起きるまで何度もぶっ叩いたらしい。

教主

夢の中でも、はっきりと感じたよ。あの感覚を。激しい打撃感……いや、被撃感と言うべきかな？

教主

とにかく、ネルのおかげで夢から目を覚ましたんだよ。



スキア

う、ううーん……。

教主

だから……スキアにもできる！

教主

私が目を覚ますまで、思いきり何度も叩くんだ！ 分かった？



スキア

で、ですが……ううう……。



スキア

司祭である私が、教主様を犬でも打ち据えるかのように殴るなど……！

教主

頼りにしてるよ、スキア。それじゃあ、あとで外で目を覚ましてから会おう。



スキア

きょ、教主様！

教主

早く戻って、夢の外へ出るんだ！

教主

スキアまでついてきたら、私たちを起こしてくれる者が誰もいなくなるだろう。

教主

ニフェルが何をするか分からない。適切なタイミングで私を引き戻してくれる者が必要なんだ。



スキア

う、ううう……わ、分かりました。



スキア

全力を尽くして……思いきり……何度もお手を上げさせていただきます。

EPISODE
7

死線から直線へ

教主

この漆黒の通路を抜ければ……。

教主

週末農場に出ると言っていたよね？

教主

夕方とも朝ともつかない空が果てしなく広がる、麦畑があるって。

教主

ニフェルに会って問い詰めるにせよ、何にせよ、まずは話をしてみよう。

教主

ニフェルがウイを連れ去ったのなら……ウイもここにいるはずだよね？

教主

まったく、問題を起こす者は、初対面では揃いも揃って話が通じないんだから。

教主

あとになってみれば、大したことのない理由だった場合がほとんどだし……。

教主

事態がさらに悪化する前に、お互いの事情を話して、誤解があるなら解かないと。

教主

ニフェルが幽霊だからかな？

教主

ペラを封印しようとしたときのことも、少し思い出すな……。

教主

あれ？ 前から少し光が差し込んでいる。出口が見えてきた。

ザッ、ザッ――

教主

ん？

教主

何だ、ここは？

教主

農場……みたいな場所じゃないよね？

教主

ただの行き止まりの洞窟じゃないか。この箱は何だろう？

教主

一つ、二つ、三つ、四つ……。

教主

……箱が七つ？ ただの箱というには、形がまるで……。

教主

永遠を生きる者の姉妹も七人……あの子たちから聞いた話を考えると……。

教主

まさか、ここが……姉妹たちが眠っていた場所なのか？

教主

世界樹は、あの子たちをこんな場所に入れて、埋めてしまったの？

教主

……。少し……嫌な気分だな……。

教主

農場の入口は、いったいどこにあるんだ？

教主

気味の悪い場所だし、早くどこかへ移動したいんだけど。

???

気持ち悪い。

???

もう二度と、ここには来たくなかった。

教主

何だ？ どこから聞こえてくるんだ？

???

そう。あなたがそう言うと思っていた。

???

思い出したくもなかったのに。

???

どうして、そこまでして私を連れていこうとするの？

???

あなたには何の得もないでしょう。

教主

この声……ウイに似ているけど……。

教主

話し方がウイらしくない。

???

さあ、どうして君を連れていきたいのだろうね？

???

一種の……トロフィーのようなものかな？

???

それとも、自分の能力を証明したいのかな。

教主

これはニフェルの声だ。間違いない。

???

正直、私にもよく分からない。

???

何か、義務感のようなものを感じている気もするし。

???

それに……何だか気に入らない。

???

君だけじゃない……君たち姉妹全員がね。

???

みんな私を避けていった。本当は……そんなことをしてはいけないんだよ？

???

まったく……あいつが何をしようとしているのか、分からないんだから。

???

幸せな世界を作るだの何だのと言っているけれど……。

???

何一つ、よくなっていないじゃない？

???

少し……かわいそうな気もする。

???

どうして、手をつけるものすべてを、あんなふうになくしてしまうのだろう？

???

あまりにも往生際が悪くない？ 惨めで、痛々しい。

???

君もそう思うでしょう？

???

いくらそう言ったところで、君ほどの失敗作は二度と現れないだろうね。

???

ああ！ 痛いな～、とても痛い。私の心が。

???

その冷たい刃が、私の心を貫いていくよ。

???

まったく、傲慢で意地の悪い子だね。

???

今の君に、そんなことを言う資格はないと思うけど。

???

それで？ 君に何ができるの？

???

何もしないじゃない。私をここに閉じ込めて、ただ見ているだけ。気味が悪い。

???

そこが肝心なのだよ。

???

昔は私も、いろいろと試したことがあった。

???

炎の中へ落としてみたり、凍らせてみたり……。

???

一寸先も見えない真っ暗な空間に入れてみたり。眩しいほど明るい部屋にも入れてみたり。

???

落として、拾い上げて、埋めて、また入れて、出して、押して、引いて、叩いて、撫でて、舐めて、吐き出して、投げて、吊るして、擦って、削って、切って……。

???

切って、切って～、切って～、切って～……。

???

でも……自分が何をしているのか、分からなくなった。

???

どうして私が、そこまでしなければならないのだろう？

???

待つことこそ……私の最も強い力なのに。

???

だから今は、ただ放っておいているんだ。

教主

いったい、何の話をしているんだ……？

教主

それに、どこから聞こえてくるんだよ?! ここか？ 周りには隙間らしきものもないのに！

教主

声が遠ざかる前に、早く会わないと……ううっ、もどかしい！

きよろきよろ——

教主

もう、どうにでもなれ！
おい！ 出てこい、ニフェル!! 私がここまで来たんだぞ!! 週末農場とかいう場所には、どうやって行けばいいんだよ!!

ニフェル

何？

ニフェル

死んだの？

教主

えっ？

ニフェル

生きているの？

教主

え？

ニフェル

どうしてここへ来たの？

教主

ええと……君に会うために……。

ニフェル

そう？ 死にたいの？

ニフェル

私が何とかしてみようか？ 少し難しいだろうけど、試してみても損はないよね。

教主

ち、違う！ 死にたいんじゃない！ ただ君と話をしたくて来ただけだ！

ニフェル

悪いけれど……本当は、そんなことになってはいけないんだよ？

ニフェル

さようなら～。

教主

え？ ちょっと、待って！ 駄目だ!! す、少しだけ週末農場へ行かせて！ ほんの少しでいいから！ ちょっとだけ入らせてくれ！

ニフェル

死にたくて仕方がないんだね。

教主

ううっ、スキアがいつ私を起こすか分からない。

教主

早く……こんな状況でも、とにかく急いで聞かないと！ 君がウイを連れていったの？ シルヴィアはもう狙わないの？ 君は世界樹が作ったの？ 世界に死を教えた人間もここにいるの？ ここが週末農場なの？ そこには君しかいないの？ 私は連れていかないの？ どうしてほかの者たちを連れていくの？

ニフェル

……………。

教主

……………。

ニフェル

うん、違う、うん、知らない、さあ、違う、知らない、何となく。

教主

もしもし？ えっ？ 何だ、どこへ行ったんだ？

ニフェル

三。

ニフェル

二。

ニフェル

一。

ニフェル

わあっ！



ニフェル

……？

ニフェル

どうやら、ここに居残って、ずいぶん私を煩わせるつもりみたいだね……私に会って、いったい何をしたいの？

教主

話をしたいって言っただろう？

教主

それから……どうしてウイを連れていったんだ？ ウイを返してほしい。ウイがいなくなって、みんな苦しんでいるんだ！

ニフェル

みんな？

教主

まあ……今はウイが消えたことを知っているのはアヤとヴィヴィだけだけど……時間がたって全員が知れば、間違いなく深刻に受け止める！ 何か誤解があったみたいだけど、話し合っ解決できないかな？

ニフェル

誤解？

教主

そうだ！ だから一度引き下がったんじゃないの？ シルヴィアに何かしようとして失敗して、また退いたんだろう。それでウイを連れていったんじゃないのか？ 君を邪魔したヴィヴィに腹を立てて？

ニフェル

腹を立てた？

教主

そうだ！

ニフェル

ふうん。

教主

ほら、今は私が突然訪ねてきたから、居心地が悪いのかもしれない。そういうことだよな？

教主

でも、これだけはどうしても言いたかった。エアリアスで起こる騒動は、みんな些細なことから始まるんだ。

教主

事情を知ってみれば、そこまで深刻になるようなことではなかった。きっと話し合いで解決できるはずだ。そうだろう？
だって君も結局は、エアリアスの住民の一人なんだから。世界樹が誤って君を生み出したのだとしても、君もこの世界の
一員なんだ。

教主

ほかの幽霊たちも、みんなそうだった。最初はどのような様子にも見えても、事情を知れば、そこまで悪い者たちでは
なかった。

教主

だ、だから、今回のことについて落ち着いて話そう。ね？ 話し合いが嫌なら、せめて交渉でもしよう。

ニフェル

……………。

ニフェル

そう、私は幽霊。世界樹が作った最初の幽霊。それが世界樹の望んだことだったかどうかなんて、関係ない。とにかく生
まれてしまったんだから。

ニフェル

うえっ！

教主

な、何だ、急に?!

ニフェル

ごめん。「生まれた」という言葉は少し気持ち悪くて、口にしたくなかったんだけど、うっかり出てしまった。

ニフェル

人間。君はまだ、私のことをよく分かっていないみたいだね。私は話の通じる幽霊ではないんだよ。

ニフェル

いいや、話に通じてはいけない幽霊なんだ。君の意志がどれほど強かろうと、君の欲望がどれほど大きかろうと、何の関係もない。

ニフェル

私はただ存在し、その存在の在り方に従って行動するだけ。

ニフェル

すべての幽霊は、自らの観念から自由にはなれない。どれほど取るに足りない幽霊であっても……自分が生まれた観念からは逃れられない。

教主

シェイディは変わったじゃないか！ リムだって確かに変わった！

ニフェル

ああ、ああ、ああ。

ニフェル

あの二人は、自分の観念を捨てたわけではない。むしろ今でも、忠実に従っているよ。

ニフェル

混沌の中に浮かぶ無数の顔のように。そして、均衡を量る天秤の上で。

教主

うっ……分かった。それなら……いったいどうしてウイを連れていったんだ？ 何の罪もない子を突然連れ去って、どうするつもりなんだよ？

ニフェル

連れて行ってはいけないの？

教主

だ、駄目だと言ったら？

ニフェル

君に何ができるの？

教主

な、何だって？

ニフェル

あの子は、もう何度も一線を越えている。例外にはできない。必ず連れていかなければならない。

ニフェル

死を弄んだのなら……代償は払わないと。

ニフェル

死がさらに重なるわけではないけれど……まあ、仕方がないよね。

ニフェル

それから……。

ニフェル

これは、まだ始まりにすぎない。

教主

始まりにすぎない？

ニフェル

七人。全員連れていくよ。もう連れていってもいいという許しが下りたようなものだから。

ニフェル

あの……「自称・霧雨の精霊」を名乗る詐欺師を連れていったとき……世界樹は何もしなかった。明らかに、昔とは何かが違うんだよね。

ニフェル

どうやら……自分のおもちゃには、すっかり愛想が尽きたみたい。一度自分の手で捨てたのなら、二度目は簡単だろうしね。

教主

七人姉妹を全員連れていくつもりなの……？ だ、駄目だ！ そんなことはさせない!!! どうしてあの子たちを！ あの子たちに何の罪があるんだよ！

ニフェル

ふうん。好きなだけ叫んで、怒って、祈って、悲しめばいい。そして、気持ちを切り替えるんだね。

ニフェル

私の観念は不可抗力だよ。どうしても私を止めたいのなら、大いなる御方を連れてくるといい。どうせ私を止められるのは、あいつしかないから。

ニフェル

本当に連れてきたら、少しくらい考えてあげてもいいかも？

教主

私が……連れていかせない。ウイも必ず取り戻す！ 好きにはさせないから！

ニフェル

そう。それが最初の段階だよ。みんな、そうやって否定するところから始める。自然なことだよ。よくできているね、教主。

教主

う、ううっ！ こいつ！ 私をからかっているのか？ それとも本気なのか？ 分からない……。

ドンッ！

教主

うぐっ？

ニフェル

ん？ 何だろう？

ドンッ！

教主

うあああ……何だ、この感覚は？ 外から私を起こそうとしているのか？ でも……痛すぎない？ うううっ……！

ニフェル

教主？ 何をしているの？ 何だか……不思議。

教主

何だって？

ニフェル

君の存在が鮮明になっている。この感覚は……あのとき感じたものと似ている。そう……。

ニフェル

歓喜……！ この正しいと感じる感覚……これ、いいかもしれない。

ニフェル

こちら側へ渡ってこようとしているの？

ニフェル

それなら、早くおいで。正式にこちらへ入ってくるというのなら、受け入れてあげてもいいよ。

ドンッ!!!

教主

うおおおっ！

ニフェル

何だろう？ 近づきながら、どんどん遠ざかっていくじゃない。やるなら、どちらか一つにしてよ。紛らわしいでしょう。

教主

ニフェル……絶対に……誰も連れていかせない……！ 絶対に……。

ドカン!!

教主

させないからなああっ！

ニフェル

ふうん。惜しいな。

ニフェル

……。あと少しで、こちら側へ渡れたのに。